

九月十七日

七時起床。猫のニコライ（私はイワノフと呼びたかった）がなついで、眠っていてもつきまといもぐり込んでくるので少々大変。しかし、動物になつかれるのは初めての体験なので、むずかゆいような感じもある。十時研究室、松下、旭化成、日立の各専門家たちと打合わせ。社長若松氏、李祖原と昼食。十四時、TB・S・TVスタッフと高橋工業社長来室。高橋工業が主役の番組に花をそえる役で研究室にて収録。十五時修了。十川アパートの取壊し完了。テック行くに行けず来週にしよう。十七時半森の学校関連打合わせ。十九時半修了。故宮院コンペ案はどうやら遅れて届いてしまったらしい。夜、がっかりしている台湾人留学生をなぐさめる。海外のコンペは連戦連アクシデントだな。

九月十八日

昨夕、久し振りに研究室のスタッフ丹羽太一君と話した。このホームページの編集者である。丹羽君は十二年前に突如病に犯され首から下が不自由になった。その前は普通以上に元気な青年であつたから、事故としか言い様のない身体の激変を受け入れるのは実に困難であつたらうと、今だから想像できる。当時は私も、ただただ驚くばかりであつた。

年を経て、私もいささかの経験を積み、人並みに体力も落ちてきた。まだまだ何かをしなくてはという情熱だけは衰弱していな

いのだが、それを支えるべき身体の衰弱は、眼に視えて自覚せざるを得ない。そんな今、丹羽君の存在が私の視界に明快な点として入ってきている。決して自然には言えぬが、多分に意図的な趣もあるのだが、丹羽君の身体と私の生活空間の関係が決して無縁では無い事が解ってきた。少なくともそう考えたいと思いつている。いつもの悪い癖で、こんな風に書き出してしまうと肩に力はいってしまい、大論文を書くような気持ちになつてしまふ。はやる気持ちを抑えて、ここらでとり敢えずプツンといきなり、この事は中断してしまう。日記だから仕方ないのだ。要するに私がこれから十年かけてやろうとしている事と丹羽君の不自由な身体とは関係が無くもない予感を言おうとしている。その予感、私も当然加速度をつけて不自由な身体になつていくだろう、自由な身体があるとも思えぬが、つまり、丹羽君の今の身体状態を身近に共有、あるいは少しはリアルに感じる事ができるようになり始めている事と関係している。

屋上のカラスがウルサイなア。

丹羽君が昨夕言つてた事で唯一リアルにその音声聴こえたのは、何が口惜しいかと言つて、コンピュータのキーボードを操作するのが片手の少しは自由が利く方の手でポツンポツンとしかできないという事であつた。つまり、思考の速力が身体の不自由さに枠づけられているという事である。で、私はこう言つた。

「でもさ、丹羽、そのポツンポツンという不自由な速力つてのが、これからとても大事になつてくると思うんだけど。」

スローフード・ファッションがぶれ程のバ力ではないが、たんなる思いつきで言つたにしては上出来だつたと思う。マア、悪いクセでその場当りの、はげましをしてしまったのだが、その悪いクセだつて私の身体の現実が作り出しているのである。

十一時前、富士嶺観音堂に向けて中央高速道を走っている。二十五KMの大渋滞である。原口夫妻が同乗。家内と原口夫人のおしゃべりがもう一時間程途切れもせず続いている。近隣の事、身近な話しの連続である。デイスービス、介護等の話題が中心である。今日は富士嶺観音堂のオープンングで、身体や気持ちに悩みを持つ人が沢山集まるらしい。観音堂の事実上のオーナーである中川さんから、何か話してくださいと言われていたのだが、丹羽君の事でもはなしてみようかとボンヤリ考えている。河口湖近くのソバ屋砂場で昼食。十四時頃観音堂につく。百名程の人が集まっていた。深い霧で富士山も何も見えぬ。何か話をせよとの指示なので、二、三分この建築にまつわる話を皆さんに聞いていただく。丹羽君の話はしなかった。オーナーよりカサブランカの大輪の花束いただく。内部は人が沢山いる方が面白い空間になっている。カレーライスとおいしいコーヒーいただく。内外の写真をとる。沢山撮った。しかし、富士山がきつちりと見える日の写真をとっておかなくてはならない。帰りがけに、五、六才の子供たち六七人に「どうもありがとうございました」と言われ、不覚にも「こちらこそ、ありがとう」と答えてしまう。マア、本音が出てしまったんだね。子供に、こんな風に作った建築を感謝されてしまったのは、これ迄三〇年に渡る建築渡世でも無かった。小さくて、弱くって、大人とは異なる感性と想像力を持つ子供と、不由な身体の主である丹羽太一とは、同種族である様な気がするのだが、まだ良く考えることが出来ていない。十七時前富士ヶ嶺を去る。川口の小作でほうとうの夕食を喰べ、帰りは順調に高速を走り、二〇時半東京着。世田谷村二十一時戻り。

九月十九日

終日、休養と読書。ちなみに読んだのは村上龍のタナトス、ポードリヤールのパワー・インフェルノ、そして横尾忠則の対談集。我ながら脈絡が無い。もう一冊ひどいホラー小説も読んだがコレはゴミだったので名は記さぬ。タナトスは明らかに形式として失敗している。村上龍のキューバへの個人的関心をベースに、シャーマニズムの神話的世界、そして、その神話のベースとしての性にまつわる物語のトライアングル構造なのだが、全体の構成が余りにも非対称で、バランスに欠けていた。書きたい主題へのエネルギーは強いだけけれど、それを形として抑制する力が明らかに欠けていて、習作の域を出ていない。ところが村上春樹の書き物との違いだろうと思う。横尾忠則の対談集は総じてつまらないが、唯一、鶴見俊輔との対談中、鶴見の発言が痛烈に面白かった。知性において少しばかり落差があり過ぎて、鶴見の発言、横尾は商業主義の真只中に居て、ただその台風の眼の中に在るので色々な事を良い水準で発言できるのだ、と言う指摘を横尾は理解できていない。あるいは受け容れようとしていない。感性も商業主義的になってしまっているんだろう。しかし、こういう対談集の中でも鶴見の確かな卓見は際立っているのは驚くべきものがある。

九月二〇日 休日

今日も休養。午前中銅版画に彩色。終日読書。村上春樹の軟弱なウイスキーの本、もし僕らの言葉がウイスキーであつたなら。この人のエッセイは実につまらないが、ホツとさせられるのも確かだ。村上龍「ライン」、これは全然ホツとしない。かと言って深く考え込むわけでもない。不完全。堀田善衛定家明記再読。井上ひさし父と暮らせばシナリオ、ポードリヤール等を乱読する。十六時前原口氏来宅、四方山話し。原口氏との会話の方が諸作家

の作品よりもシリアスであった。原民喜の本を本格的に読んでみようと思った。ひろしまハウスと取組んでいるのだから、それ位はエチケツトだったのだな。

父と暮らせばのシナリオを読んで色々と考えた。世の中は、健常者そして生きている人間ばかりで成り立っているわけではない。体や気持ちに傷を負った人と混在しながら世界は成立している。

この現実を的確に把握した社会論が必要な気がしてならない。それをベースにした論の成立も急務であろう。と、偉そうな事言う前に、これは私がやらなければならない。モダニズム・デザインへの本能的な距離感は、そのデザインの枠組みが抽象的思考、あるいは趣向を成立させ得る知識人、教養人をベースにし、又、それを対象としている事なのだ。